

山 中 久 美 子

小学校生活を円滑にスタートさせるための幼稚園における取り組み

— 有効な連携で「具体的支援」を小学校へつなぐ —

Support in Kindergarten for a Smooth Start in Elementary School : Making an Effective Coordination

山 中 久 美 子

Kumiko Yamanaka

I 問題と目的

保育所や幼稚園ではこれまで統合保育として障害児の保育を実施してきたが、田中（2007）が指摘するように、小・中学の通常学級に在籍する発達障害といわれる子ども達が園内にも同程度の比率でいることが考えられ、幼児教育にも新たな対応が迫られている。

一方、小学校現場では「小1プロブレム」の問題が指摘される中、「幼小連携」が重要課題とされながらも、その要因の1つとしての発達障害が十分にとりあげられてきたとは言い難かった(田中, 2007)。しかし、特別支援教育の考え方がようやく浸透しつつある今、「環境(人・時間・空間)と子どもの行動をセットにした引き継ぎ」に基づくような「幼小連携」が可能になるのではないかと考える(佐藤, 2008)。

そこで、本研究では、

1. 移行期における幼小連携の取り組みを実施し、各取り組みの有効性を検証する。入学期に必要な学びや育ちを明らかにする。
2. 「具体的な支援」をしていくための園内委員会の取り組みを実施し、その有効性を検証する。

さらに、

スムーズなスタートに向けた幼稚園の役割を考察し、「具体的支援」につながる有効な「幼小連携」と「園内委員会」を明らかにする。

以上のことを目的とする。

II 研究1

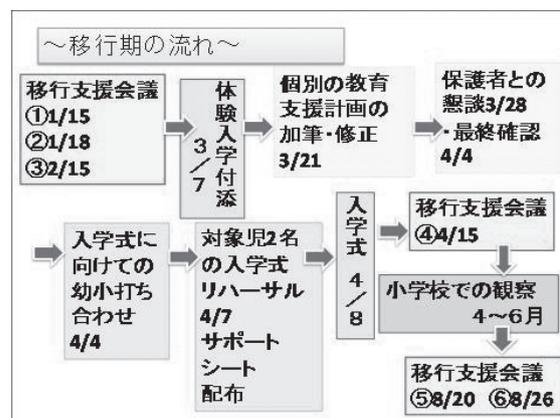
幼小連携（接続期における取り組み）

(1) 目的

移行支援会議を含む移行期の取り組みを実施し、移行期の流れと各取り組みの具体的支援実現の有効性を検証すると共に、発達が気になる子らが入学期に必要な学びや育ちを明らかにする。

(2) 方法

- ・時期：200X年1月～200X年8月
- ・対象園・校：X町立Y小学校・Z幼稚園
- ・対象児：A児・B児 他気になる幼児
- ・分析方法：対象児入学後の観察によるエピソード・アンケート・聞き取りから
- ・移行期における取り組みのながれ



(3) 結果

どの取り組みも具体的支援につながった。特に気になる幼児は体験入学前の移行支援会議③で引き継ぎシートを含む、実態や特性、支援の具体例の引き継ぎから、具体的支援がなされた。また入学1週間後の移行支援会議④では、担任にサポートシートや具体的支援ツールを見てもらうことで具体的支援がなされた。

(4) 考察

スタート時の生活ルール等の視覚提示はそのまま十分有効なことがわかった。取り組みに必要な要素は子どもの成長過程と現在の姿を知ってもらうこと、支援と支援の根拠（子どもの特性から考えられる）を知ってもらうこと、支援のコツ（タイミングや使い方など）を知ってもらうことである。どの取り組みにおいても、

特性とそれに対する園での支援を、実感を伴って理解してもらうことを強く念頭に置いて臨むことが必要である。

Ⅲ 研究2

幼稚園における取組

(1) 目的

園内委員会におけるケース会議・職員研修・保護者支援の3つの取り組みにポイントを絞り、具体的支援実現の有効性を検証すると共に、小学校に向けてつけておきたい力の支援につながることも併せて検証する。

(2) 方法

- ・時期：200X年4月～200X年10月
- ・対象園：X町立Z幼稚園
- ・対象児：P児・Q児他気になる幼児
- ・分析方法：観察によるエピソード・アンケート・聞き取りから

(3) 結果

◎ケース会議

・個別の指導計画の様式の改善と月1回のケース会議の実施（長期・短期目標について）
・気になる幼児の為のチェック表・気づきの資料・ストラテジーシート等を使った話し合い
《結果》具体的な対象児の姿を各職員から引き出すようにすることで、集団としての実態把握の力量が高まった。また対象児の特性への考慮を促すことにより、支援を考えた上での目標設定ができるようになった。共通理解もでき、対応にも一貫性があるため、確実に具体的支援がなされ、対象児の育ちにつながった。

◎研修会

・集団遊び（ゲーム）における支援の工夫について（保育活動案作成とビデオ視聴検討）
・製作活動における支援の工夫について（チームによるディスカッションとビデオ視聴検討）
《結果》集団活動における支援のポイントを示すことで、職員一人一人の具体的支援への気づきが増え、話し合いでお互いの気づきも知ることができた。その学びを活かして、違う場面・違う対象児にも具体的支援をする事が増え、対象児の育ちが促された。

◎保護者支援の推進

- ・教育相談の実施と職員全員の共通理解

《結果》安心して話せる場を提供することで、不安を軽減し、気持ちの整理や新たな気づきをしていくきっかけとなった。担任と保護者が一緒に課題を共有し具体的な支援をしていくことで、対象児の育ちにつながった。

(4) 考察

ケース会議・研修会・保護者支援どの取り組みにおいても、必要な要素は職員全員が幼児や保護者の姿の共通理解をしていること・具体的支援を考えていくにあたっては職員の考え方の総意が基盤になっていること、実際に支援をしていくにあっても一貫していることである。園内でのPDCAの機能を活発にし、支援を充実させて幼児の快適な環境作りを整えること必要である

Ⅳ 総合考察

気になる幼児に対しての入学期にむけて身につけておきたい力を育むための具体的支援は充実した。自ら気づき、仮説を立て実践し振り返り、さらに気づき仮説を立ていくという進め方で小さな成果を積み上げながら蓄積していった結果であると考え。園でも小学校でも具体的な支援が可能となると、発達が気になる子にとって生活は安心して活動できる整備された環境となり、小学校生活を円滑にスタートさせることにつながると考える。今後の課題は園内委員会の通貫性を幼小連携の場にも活かしていく事が必要であると考え。